

Agitato.

アニイが愛し子を埋葬し、数日が経った。
 彼女の安らぎを心から願っていたフィリップは、
 イノックが旅立って以来、訪ねる事を控えてはいたのだが、
 「もう会ってもよからう、いくらかでも慰めになれば。」
 と思い立ち、やって来た。

表の部屋は人気なく、そこを通り抜け、
 フィリップは奥の小部屋の戸口に佇んだ。
 三度ノックしたが、返事がないので中に入ってみると、
 アニイが悲しみに沈み、座っていた。
 愛し子を埋葬し、まだ日も浅く、
 人と顔を合わせる気にもなれず、
 壁の方を向いて泣いていた。
 フィリップは佇んだまま、ためらいがちに言うのだった。
 「アニイ、あなたにお願いがあってやって来ました。」

[「悲しみ、沈み込んでいる、こんな私にお願いとは。」
と答える、呻くようなか細い声に、
フィリップは戸惑いながらも、恥じらいつつ、
そばに近づいて、優しく言葉を続けた。]

「あなたの夫イノックがいつも望んでいた事は、
あなたと子供たちの幸福です。
今度の航海も、お金を貯え、
可愛い子供たちを立派に育てるために出かけたのです。
だからこそ、子供たちの成長の日々がいたずらに過ぎてしまったならば、
さぞ悔しく思う事でしょう。
[あるいは、もう死んでいたとしても、浮かばれぬ事でしょう。
アニイ、私たちは幼なじみではありませんか。
お金の事はあなたのお心次第で、
なに、イノックが帰った時に返して頂けばいいのです。
私は今、何不自由ないのですから。]
アニイ、二人のお子さんが学校へ通う世話を
私に見させては貰えませんか。
このお願いを許して頂こうと、こうして訪ねたのです。」

アニイは額を壁に付けたまま答えた。
「あなたに会わせる顔がありません。
[打ちひしがれたこの私は、さぞや愚か者に見えるでしょう。
あなたのご親切にただ戸惑うばかりです。]
でもイノックは生きています。
イノックが帰りましたら、お金はお返し出来ましようけど、
このご親切に、どうすれば報いる事が出来ましよう。」

[アニイは立ち上がり、フィリップの優しい顔を見つめ、
「神様、この方にお恵みを。」と祈りつつ、
手を取って、握りしめ、
庭の方へと走り去った。]

こうしてフィリップは子供たちを学校へ通わせることになり、
本や必要なものを買ってやり、
我が子のように心を砕いて、面倒をみてやった。
[だがフィリップは、町の噂話になることを気遣い、
その気持ちを押し殺し、彼女の家を訪れる事は稀であった。
とはいうものの、ハーブや果物に
早咲きのまた遅咲きのバラを添えて子供たちに持たせたり、
また野兎や、時には恵むなどというはしたない行為を遠慮して、
この見事な出来栄えを見てくださいと、
自分の粉引き場で仕上げた小麦粉なども贈るのだった。]

子供たちもフィリップを心から慕うようになり、
 粉引き場へやって来ては、悪戯をしたり、
 縋り付いたりして、一緒に遊ぶのだった。
 やがて彼を、フィリップ父さんと呼ぶようになり、
 子供たちの心はイノックから段々と離れて行った。
 子供たちにとってイノックはもう、夢か幻のように捕え所なく、
 明け方の並木道に消えてゆく人影のように、儂いものに思われた。

(台詞切掛)

Tranquillo.

こうして 十年が過ぎた。

イノックがわが家をあとに、故郷を離れてより、

その便りは一度もなかったのである。

ある夕暮、子供たちが友達と一緒に榛の森へ木の実拾いに行きたいとせがむので、
 アニイは一緒に付いて行く事にした。

子供たちは大好きなフィリップ父さんも誘おうと、粉引き場へやって来て、
 粉まみれのフィリップに、一緒に行こうとせがむのだった。

一度は断ったものの、子供たちの熱心な誘いに、
 アニイが一緒ならと、出かける事にした。

山道の中ほど、ちょうど緩やかな斜面の終わり、
 森の入り口あたりで*アニイは息を切らせ、

「休ませて。」と言った。

フィリップはその傍らに共に休んだが、
 [子供たちは二人を離れ、楽しげに歓声をあげながら、
 森のあちこちで、榛の実を採ろうと大騒ぎしていた。
 フィリップは、傍らに]アニイがいることをしばし忘れ、
 昔、手負いの獣のようにこの森の茂みに身を隠した、
 あの重く申し掛かる暗黒のひとときを思い返していた。

*アニイとイノックがかつて
 気持ちを通わせた場所。

ようやく誠実な表情にもどると、彼は言った。

「お聞きよ、アニイ。森の中で子供たちがあんなに嬉しそうに騒いでいるよ。

疲れたの、アニイ。」

(台詞切掛)

「疲れたの」という問いかけに
アニイは何も答えず、

168 **Langsam**

ただ両手に顔を
埋めたままであった。

173 *espress.*

177 *mf* *dimin.* *p*

何かしら腹立たしさを覚えながらもフィリップは続けた。

「船は沈んだ。船は沈んだんだ。

そうとしか考えられない。

なぜあなたは我が身を滅ぼし、

子供たちを父無く母無き孤児にしようとするのです。」

[アニイは答えた。

「そのことを考えていたのではありません。

何故だかわかりませんが、子供たちの声を聞いていると、

言い知れず寂しくなるのです。」

そこでフィリップは少し身を寄せて、言った。]

「アニイ、私には考えている事があります。

イノックが旅立ってもう十年になります。

どんなに望んでも、彼が生きているとは到底考えられません。

私は、寄る辺無く貧しい暮らしをしているあなたを見るのが辛いのです。

心に思うほどにも力添えできないし。

だから、私の言いたい事はおわかりでしょう。
私の妻になつては貰えませんか。
[子供たちも私に父親同様になつているし、
私とて実の子のように愛している。
よく考えてみて下さい。]
私は今、何不自由ない境遇だし、
煩わしい親類も無く、何の重荷もありません。
気掛かりなのは、あなたと子供たちの事です。
私たちは幼なじみだし、それに私はあなたを、
ずっと昔から愛しているのです。」

アニイは優しい口調で答えた。

「あなたは我が家にとって、神が遣わした天使です。
神のお恵みがありますように。
その報いとして、私などよりもっと幸多き方ときっと巡り合えるでしょう。
それに人は二度恋することなど出来ましようか。
イノックと同じようにあなたを愛することなど、どうして出来ましよう。
何をお望みなのです。」

「私はイノックほど愛されなくとも満足です。」

彼女は脅えたように叫んだ。

「ああ、フィリップ、もう暫く待ってください。
もしイノックが帰ってきたら。
いや帰る事は無いのですが。
でもあと一年待ってください。
一年はそう長くはありません。
一年したらきっと納得できるでしょうから。」

フィリップは悲しげに言った。

「アニイ、私は長い間ずっと待ってきました。
あと暫く待つぐらい何でもありません。」

「いえ、大丈夫。

固くお約束します、あと一年。」

ただ一瞬のきらめきの如く月日は流れ、再び秋。

フィリップはアニイに約束を申し出た。

「もう一年に。思い余る事も多く、こんなにも早く。
あと一月、一月だけ。」

フィリップはその生涯の満たされぬ思いを瞳に表し、
声を震わせて言った。

「いつまでも、いつまでも待っています。」

アニイは申し訳なく泣きたいほどであったが、
信じられようも無い言い訳をあれこれと並べ、
一日、また一日と。

いつしか半年は瞬く間に過ぎて行った。

息子は、その気持ちを顔に出すものの黙っていたが、
 姉娘は、自分たち一家をいたわってくれるフィリップと結婚するようせがむのだった。
 フィリップはやせ細り、薔薇色の頬にも生気が失せた。
 これもすべて自分のせいと、アニーは自らを責めるのだった。

ついにある晩のこと。
 アニーは寝付かれず、心をこめて、
 「イノックは何処に、お告げを賜え。」と祈りを捧げた。
 真夜中、暗闇に囲まれ、何かしら恐ろしくなり、
 ベッドから起き上がり、明かりを灯すと、
 夢中で聖書を取り上げ、お告げを求め、
 いきなり押し開き、指を押し当てた。
 その文字は、「棕櫚の木陰に*」
 所詮空しいこと。
 何の意味もない。
 彼女は聖書を閉じると、眠りについた。

(台詞切掛)

*イノックが置かれている状況を暗示している。【P.21】

Annie's Traum
 Langsam

(こは如何に!)
 これを見よ! イノックは 高き処に

*どちらの訳語でもよい。
 etwas hervortreten

座り、 棕櫚の木陰に。太陽は頭上に輝く。 彼は死んだ。アニーは思った。 彼は

幸せ、 歌う、 Hosanna in the highest 彼方には 正義の